

幼児の社会性の発達に及ぼす未満児集団保育経験の影響

松永 あけみ¹⁾・清水 彩香²⁾・飯塚 舞子³⁾

- 1) 群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座
- 2) 群馬県発達障害者支援センター
- 3) 所属なし

(2014年9月17日受理)

The influence on the social development of young children of participation in group-nursery under 3 years

Akemi MATSUNAGA¹⁾, Sayaka SHIMIZU²⁾, Maiko IIZUKA³⁾

- 1) Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University
- 2) Gunma Prefecture Support Center for People with Developmental Disabilities
- 3) No affiliation

(Accepted on September 17th, 2014)

問 題

平成25年4月1日現在、3歳未満児の人口は3,155,000人、うち保育所利用児童数は827,773人で3歳未満児の26.2%の児童が保育所を利用している(厚生労働省)。また、総務省の指標(保育サービス)の数値目標は、平成29年度における3歳未満児の潜在的な保育需要を満たすことを目指し、44%に設定されている(総務省, 2013)。このように3割近い子どもが3歳未満から保育所に通い、今後、この傾向は高くなると予想される。

日本では3歳児神話と言われるように、3歳未満から保育所に入れること(以下、未満児集団保育と記す)に対してネガティブな風潮があった。そして、3歳未満から保育所に通うことが希ではなくなっている現在においても、なお、抵抗や子どもへのうしろめたさ、子どもの発達への心配を持つ親が多く存在していることが、ネット上のやりとりから窺える。

未満児集団保育の子どもの発達への影響に関しては、1970年代頃から愛着関係、言語発達、性格、社

会性など様々な観点から研究がなされてきた(金田; 1969, 1972、百木, 1980、柏原, 1982、大野・伊志嶺他, 1983、土屋・久保・濱, 1984、上田, 1984、高松; 1984, 1985, 1986、Schindler, Moely., & Frank, 1987、Lamb, & Sternberg, 1990、Howes, 1991、Aureli., & Colecchia, 1996など)。また、単に未満児集団保育経験の有無だけでなく保育の質や保育時間などとの関連での検討もなされている(NICHD Early Child Care Research Network; 2003a, 2003bなど)。そして、未満児集団保育を経験する子どもたちが多くなってきた近年においては、その経験の発達への影響という視点ではなく、未満児集団保育において子どもたちがどのような経験をしているか、また、保育士のかかわりや保育環境の検討など、保育の質に関連した研究がなされるようになってきている(朝生・斉藤・荻野, 1991、松永・斉藤・荻野, 1993、本郷・杉山・玉井, 1991、齋藤, 2012、樋口・藤崎, 2014など)。

このように未満児集団保育経験と子どもの発達との関連に関する研究視点は、社会状況とともに変化

してきているが、今なお、未満児集団保育に対して不安を持つ保護者がいる現状において、再度、未満児集団保育経験の子どもの発達に及ぼす影響について検討することも意味あるものと考えられる。

高松 (1984, 1985) は、集団保育経験が子どもの発達に及ぼす影響を調べるために、保育所児グループと家庭児グループ、さらに、週 2 回短時間の集団保育をうけている中間児グループの追跡調査を行っている。津守式乳幼児精神発達質問紙を用いて、16ヶ月後の変化を検討したところ、2歳後半から3歳にかけて、集団保育経験が子どもの発達に及ぼす影響が大きいことを指摘している。さらに、高松(1986)は、これらの影響を質問項目ごとに検討し、家庭児に比べ保育所児の方が通過率が高い項目が多く、これらの項目は、子ども同士のかかわりによって習得されやすいと考えられる行動に関するものと、集団生活において保育士により習得が促進されると考えられる行動に関するものであると指摘している。

このように、保育所と家庭での保育において最も大きな違いは、保育所では同年齢や異年齢の子どもたちとともに集団での生活をすること、さらに、その集団生活を支える保育士がいることであると考えられる。それゆえ、子ども同士のかかわりや集団での活動を多く経験することによって、特に社会性の発達に影響を与えるのではないかと考えられる。

土屋・久保・濱 (1984) は、幼児の社会性に焦点をあてて、幼児社会性発達検査 (教研式改定) を用いて、幼稚園児と保育所児の比較、および保育開始年齢による違いを検討している。その結果、4歳児クラスにおいて、保育開始年齢がほぼ同程度の幼稚園児と保育所児にはほとんど差はないが、未満児から集団保育を経験している保育所児は、「自発性」と「自己統制」分野において、幼稚園児よりも得点が高いことを見いだしている。なお、「集団への参加」については、差は見いだされていない。

本研究においても、集団保育において、子どもたちは集団での行動に参加する経験を多く持つであろうし (集団参加)、それゆえ、我慢したり (自己統制)、自ら進んで活動する経験 (自発性) なども家庭に比べ多く経験するのではないかと考え、社会性として

「集団参加」、「自己統制」、「自発性」を取り上げて検討する。なお、本研究においては、就学前教育において最終クラスである5歳児クラスにおける社会性の発達について検討する。

また、幼児の社会性の発達には集団保育経験以外の他の要因の影響も考えられる。本研究では、そのひとつとして、幼児の気質に着目する。なお、気質については、社会性の発達に関連するであろう「見知らぬ人・場所への恐れ」、「フラストレーション・トランス」、「反応の激しさ (反応強度)」を取り上げる。

本研究では、今後益々増加するであろう未満児集団保育経験が、5歳児クラス時での幼児の社会性の発達に及ぼす影響について検討することを目的とする。また、幼児の社会性の発達に関連する他の要因として、幼児の気質を取り上げる。そして、幼児の社会性の発達における未満児集団保育経験の影響について、気質という要因をも含めて検討する。

方 法

1. 対象児および調査依頼対象者

対象児は、5歳児クラスに所属する幼児。調査依頼対象者は M 市内の保育所 16 所、幼稚園 5 園、計 21 所園の 5歳児クラスに在籍する幼児の保護者 803 名。そのうち 537 名分の質問紙が回収された (回収率 66.9%)。対象児の入所園時年齢別の人数を表 1 に示す。

表 1 対象児の入所園時年齢別の人数

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	計
保育所児	87	58	58	76	7	2	288
幼稚園児	9	6	18	161	53	2	249
計	96	64	76	237	60	4	537

2. 手続き

質問紙配布の承諾を得た M 市内の保育所および幼稚園に、5歳児クラスに在籍する幼児の保護者に質問紙を配布してもらった。保護者は記入後、在籍

する保育所・幼稚園に提出し、集まった質問紙を後日調査者が回収した。

なお、質問紙はプライバシー保護のため、1部ずつ封筒に入れて配布し、記入後再びその封筒に入れ封印してもらった。

3. 質問紙

調査項目は以下の通りである。

・フェイスシート

記入者と子ども（5歳児クラスの在所園児をさす、以下同様）の関係、子どもの年齢・性別、子どもの入所・園時期、他所園での保育経験の有無（有ればその時期）

・質問内容

①子どもの現在の社会性について

TK 式幼児発達検査（田中教育研究所編著）の「集団活動」「自己統制」「自発性」の質問項目と、新版 S-M 社会生活能力検査（旭出学園教育研究所、日本心理適正研究所）の指標Ⅱ～Ⅴ（2歳0ヶ月～8歳5ヶ月）に含まれる「集団参加」「自己統制」の質問項目から引用した。さらに、それらの中から内容が重複していると思われる項目を削除し、「集団参加」21項目、「自己統制」23項目、「自発性」19項目、合計63項目の質問項目を作成した。

②2歳頃の気質について

1～3歳の幼児用質問紙である Toddler Temperament Scale の日本語版を使用した。菅原・島・戸田・佐藤・北村（1994）が TTS の日本語版を独自に因子分析して抽出した7因子から、社会性の発達と関係があると思われる「見知らぬ人・場所への恐れ」（13項目）「フラストレーション・トレランス」（10項目）「反応の激しさ（反応強度）」（7項目）の3因子30項目を使用し、幼児が2歳児だった時の様子を振り返って回答してもらうよう依頼した。

なお、社会性および気質のいずれの質問項目においても、「ほとんどあてはまらない」～「よくあてはまる」の4件法で回答を求めた。

結 果

1. 各尺度の検討

①社会性尺度

幼児の社会性を測定する63項目について、因子分析を行った。3領域の質問項目を使用していることから、因子数を3とし、主因子法でプロマックス回転を行った。因子負荷量が0.35以下の項目が7項目あり、それらの項目を除外し、再度、因子分析を行った結果を表2に示す。

因子分析の結果、第1因子は「集団参加」因子（19項目）、第2因子は「自己統制」因子（20項目）、第3因子は「自発性」因子（17項目）とした。

なお、各因子の信頼性を検討したところ、クロンバックの α 係数が、「集団参加」では $\alpha=0.91$ 、「自己統制」では $\alpha=0.90$ 、「自発性」では $\alpha=0.89$ であった。

②気質尺度

幼児の気質を測定する30項目について、因子分析を行った。TTS 日本語版の中の3因子を引用し質問項目を作成していることから、因子数を3とし、主因子法でバリマックス回転を行った。気質尺度の因子分析の結果を表3に示す。

因子分析の結果、第1因子を「見知らぬ人・場所への恐れ」因子、第2因子を「フラストレーション・トレランス」因子、第3因子を「反応の激しさ（反応強度）」因子とした。

第3因子「反応の激しさ（反応強度）」において、因子負荷量が0.35以下の項目が1項目あるが、TTS 日本語版に含まれていた質問項目であり、意味的にも合致していると判断し、除外せずに使用することとした。

なお、各因子の信頼性を検討したところ、クロンバックの α 係数が「見知らぬ人・場所への恐れ」は $\alpha=0.91$ 、「フラストレーション・トレランス」は $\alpha=0.88$ 、「反応の激しさ（反応強度）」は $\alpha=0.79$ であった。

表2 社会性尺度の因子分析の結果

	第1因子 集団参加	第2因子 自己統制	第3因子 自発性
かくれんぼ・鬼ごっこなどがみんなとできる	0.784		
友達に教えられて、新しいあそびができる	0.724		
ゲームを規則にしたがってみんなとできる	0.708		
かるたなどの簡単なゲームができる	0.674		
友達と協力してひとつの砂山をつくれる	0.667		
かけっこ・ゲームを一生懸命がんばる	0.635		
積み木で友達と協力してひとつのものをつくれる	0.627		
仲良しの友達をつくれる (3人~5人)	0.617		
「ごっこあそび」ができる	0.607		
あそびの規則・順番を人に教えられる	0.601		
ぶらんこなどで順番・規則がまもれる	0.578		
じゃんけんの勝ち負けが理解できる	0.578		
運動会などで、チームのために一生懸命応援する	0.572		
おゆうぎ会などの行事によるこんで参加できる	0.554		
みんなの前で話をする・歌う・踊る	0.537		
おもちゃなどの遊具の貸し借りができる	0.454		
自分のものを友達に貸し、一緒に遊べる	0.450		
あそびや仕事でリーダーになれる	0.431		
あそびのきまりを変える・新しくつくる	0.400		
乗り物の中・大勢の人のなかでだだをこねない		0.734	
あぶないといわれた遊びはしない		0.724	
あぶないといわれたところへは近づかない		0.685	
いけないといわれたらがまんする		0.663	
約束したことはまもれる		0.601	
よく言って聞かせるとがまんしてやる		0.575	
友達のおもちゃを無理にとらない		0.563	
みんなと一緒に時は自分勝手なことをしない		0.562	
人の家で行儀よくしてられる		0.540	
自分が負けても怒ったり騒いだりしない		0.540	
外へ遊びに出ても約束を守って帰る		0.530	
お客様の菓子に手を出さない		0.527	
お腹をこわしたらお菓子をがまんする		0.513	
友達の食べているものに手を出さない		0.501	
雨の日などは、室内で親・先生を困らせず遊ぶ		0.490	
病気の時おとなしく寝ている		0.478	
自分より小さい子のわがままを許す		0.438	
みたいテレビ番組をがまんする		0.403	
年下の子がおもちゃをいたずらしても怒らない		0.402	
ごみは自分からごみ箱に入れる		0.373	
困っている友達を助けようとする			0.737
仕事のおそい子を手伝おうとする			0.733
他人のことに気がつき面倒を見ようとする			0.723
悲しんでいる子をなぐさめようとする			0.687
友達がケンカをしたら止めてやれる			0.646
おとながいなくても決まったことは自分でやる			0.521
友達の中にすすんで入っていきこうとする			0.487
いわれなくてもお客様にあいさつできる			0.486
炎天にでる時言われなくても帽子をかぶる			0.473
少しこわれたおもちゃを自分でなおそうとする			0.470
はじめての遊びもすすんでやろうとする			0.468
決められた仕事は責任をもってやる			0.454
軽い怪我なら自分で薬をつける			0.403
絵本は自分で考えながらみる			0.401
一人で遊ぶより友達と遊びたがる			0.368
おもちゃ・絵本は自分でかたづける			0.352
雨の日は自分で雨具の用意をする			0.351

(注1) 数値は因子負荷量を示している。

(注2) 項目の表現は実際のを簡略化している。

表3 気質尺度の因子分析の結果

	第1因子 見知らぬ人・ 場所への恐れ	第2因子 フラストレーション・ トランス	第3因子 反応の激しさ (反応強度)
自分の家では知らない人がそばにきても平気 (*)	0.817		
家の外で初めての大人とも気軽につきあう (*)	0.801		
家に初めて来た客にも近寄る (*)	0.794		
知らない大人と遊んでもにこにこしている (*)	0.770		
新しい環境にも10分以内で慣れる (*)	0.734		
知らない大人にもすぐに声をかける (*)	0.728		
なれない場所に初めて行っても機嫌がいい (*)	0.654		
初めての場所を探索する時活発である (*)	0.651		
よその子に初めて会うとしり込みする	0.622		
初めての人に預けるといやがる	0.603		
初めての場所だと親がいても怖がる	0.576		
初めての場所ではしばらく用心深くなる	0.551		
初めての人には15分後も警戒している	0.539		
服を着せられるときじっとしている		0.822	
髪をとかす・爪を切るときじっとしている		0.788	
顔をふく時おとなしくふかせる		0.750	
顔をふいている間おとなしい		0.740	
いやがらずに服の脱ぎ着をさせる		0.622	
お腹がすいていても食事の準備を待つ		0.568	
欲しいもの・やりたいことをがまんして待つ		0.565	
食事を待つ間じっと座っている		0.557	
してはいけない事を言い聞かせるとやめる		0.542	
お風呂の中で静かにしている		0.530	
何か失敗した時は強い反応を示す			0.726
遊びがうまくいかないと泣く・金切り声			0.706
自分の思い通りにならないと激しく反応			0.680
泣くとき足をバタバタ・腕を振り回す			0.640
遊んでいるとき声をかけられても無視			0.490
好きなテレビを見ているとき声をかけられても無視			0.467
初めて見るものは立ち止まってすみずみまで見る			0.341

(注1) 数値は因子負荷量を示している。

(注2) 項目の表現は実際のを簡略化している。

(注3) *印は逆転項目である。

表4 保育所児・幼稚園児別の社会性平均得点

度数	総合得点		集団参加		自己統制		自発性		
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
保育所児	247	165.73	22.04	64.18	8.25	54.25	8.66	47.30	9.06
幼稚園児	224	169.00	21.72	65.06	8.33	55.47	8.96	48.47	8.93

(注) 社会性尺度の質問項目で無回答の項目を含む対象者は、分析から除いてある。

2. 社会性の発達

①保育所・幼稚園別の社会性得点

保育所、幼稚園別の社会性の各因子別平均得点およびその合計平均得点（以下、社会性総合とする）の結果を表4に示す。

保育所児と幼稚園児で各平均に差が見られるか検討するためt検定を行ったが、いずれにも有意差は

みられなかった（「社会性総合」： $t = -1.62$ 、「集団参加」： $t = -1.15$ 、「自己統制」： $t = -1.50$ 、「自発性」： $t = -1.41$ ）。

以上のように、5歳児クラス時点での社会性の発達には、保育所児と幼稚園児の差は示されなかった。

なお、この結果より、以下の分析では保育所と幼稚園のデータを合併して、まとめて検討していくこ

表5 入所園時年齢別の社会性平均得点

入所園時 年齢	度数	総合得点		集団参加		自己統制		自発性	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
0歳	79	167.77	21.18	64.87	7.73	54.11	7.95	48.78	8.99
1歳	53	168.96	23.33	66.00	7.80	54.90	9.68	48.05	10.04
2歳	69	161.68	21.85	63.08	8.31	53.33	9.15	45.26	8.32
3歳	207	168.64	21.40	64.78	8.80	55.47	8.80	48.38	8.44
4歳	59	166.98	22.88	54.93	8.68	54.93	8.68	47.88	10.18
5歳	4	165.75	29.63	58.75	10.43	58.75	10.43	44.00	12.80

(注) 社会性尺度の質問項目で無回答の項目を含む対象者は、分析から除いてある。

表6 保育所児の入所時年齢別の社会性平均得点

入所園時 年齢	度数	総合得点		集団参加		自己統制		自発性	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
0歳	79	167.46	21.23	64.55	8.36	53.68	8.10	48.32	8.99
1歳	53	168.23	23.31	65.83	7.32	54.84	9.04	47.46	9.78
2歳	57	163.36	20.86	63.49	7.39	53.68	8.72	45.73	8.47
3歳	73	165.04	23.77	63.35	9.15	54.14	9.15	47.12	8.93

(注) 社会性尺度の質問項目で無回答の項目を含む対象者は、分析から除いてある。

表7 未満児集団保育経験有無別の社会性平均得点

入所園時 年齢	度数	総合得点		集団参加		自己統制		自発性	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
経験有り (0~2歳入所児)	201	165.99	22.11	64.55	8.00	54.05	8.82	47.38	9.15
経験なし (3~5歳入所児)	270	168.24	21.77	64.62	8.51	55.40	8.77	48.20	8.89

(注) 社会性尺度の質問項目で無回答の項目を含む対象者は、分析から除いてある。

ととした。

②入所園時年齢別の社会性得点

入所園時年齢別の社会性の各因子の平均得点および社会性総合平均得点の結果は表5の通りである。

入所園時年齢により5歳児クラスにおいて社会性得点に差がみられるかを検討するため、一要因分散分析を行ったが、いずれにも有意差はみられなかった(「社会性総合」: $F=1.42$ 、「集団参加」: $F=1.10$ 、「自己統制」: $F=1.31$ 、「自発性」: $F=1.94$)。なお、5歳時入所園児は人数が少ないため、分析から除外した。

以上のように、5歳児クラス時点での社会性の発達には、保育所や幼稚園に入所した年齢による差は示されなかった。

③保育所児における入所時年齢別の社会性得点

保育所と幼稚園では保育時間に差があるため、保育時間による影響が結果に反映される可能性がある。それゆえ、現在保育所に在籍している幼児のみのデータを用いて、社会性総合平均得点と各因子別の平均得点を入所時年齢別に算出した。結果を表6に示す。

なお、4歳時および5歳時入所児は人数が少ないため、分析から除外した。また、現在幼稚園に在籍する幼児のみのデータは0~2歳時入所児が少なかったため、分析は行わなかった。

入所時年齢により5歳児クラスにおいて社会性得点に差がみられるかを検討するため、一要因分散分析を行ったが、いずれにも有意差はみられなかった(「社会性総合」: $F=0.55$ 、「集団参加」: $F=1.14$ 、

表8 入所園時年齢別の気質平均得点

入所園時 年齢	度数	見知らぬ人・場所への恐れ		フラストレーション・トレランス		反応の激しさ(反応強度)	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD
0歳	86	32.30	9.35	22.74	6.11	14.89	3.70
1歳	59	31.91	7.49	22.81	5.99	15.18	4.76
2歳	73	30.38	9.20	23.02	5.93	15.26	4.20
3歳	225	31.94	8.93	24.08	6.32	14.61	4.16
4歳	55	35.16	9.33	23.89	6.88	14.83	4.24
5歳	3	34.33	4.04	22.00	8.54	10.00	0.00

(注) 気質尺度の質問項目で無回答の項目を含む対象者は、分析から除いてある。

表9 未満児保育経験有無別の気質平均得点

入所園時 年齢	度数	見知らぬ人・場所への恐れ		フラストレーション・トレランス		反応の激しさ(反応強度)	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD
経験有り (0~2歳入所児)	218	31.52	8.84	22.86	6.00	15.10	4.16
経験なし (3~5歳入所児)	283	32.59	9.04	24.03	6.43	14.61	4.18

(注) 気質尺度の質問項目で無回答の項目を含む対象者は、分析から除いてある。

「自己統制」：F=0.23、「自発性」：F=0.91)。

以上のように、5歳児クラス時点での社会性の発達において、保育時間の影響を考慮しても、入所時の年齢による差は示されなかった。

④未満児集団保育経験の有無別の社会性得点

未満児保育経験の有無による社会性総合平均得点および社会性各因子別平均得点の結果を表7に示す。

未満児集団保育経験の有無により各平均得点に差があるか検討するためt検定を行ったところ、「自己統制」においてのみ有意傾向がみられた(t=-1.90, 0.05<p<0.10)が、それ以外には有意差はみられなかった(「社会性総合」：t=-1.10、「集団参加」：t=-0.06、「自発性」：t=-0.99)。

未満児集団保育経験有り群は無し群と比べて、5歳児クラス時点での「自己統制」得点が低い傾向にあった。

3. 気質の差

①入所園時年齢別の気質得点

入所園時年齢別の気質の3因子の平均得点の結果は、表8の通りである。

入所園時年齢により、気質に差がみられるかを検

討するため一要因分散分析を行った。なお、人数の少ない5歳時入所園児データは除いた。その結果、「見知らぬ人・場所への恐れ」においてのみ有意傾向がみられ(F=2.06, 0.05<p<0.10)、それ以外には、有意差はみられなかった(「フラストレーション・トレランス」：F=1.03、「反応の激しさ(反応強度)」：F=0.47)。

4歳時入所園児において、他の入所園時年齢群に比べて、「見知らぬ人・場所への恐れ」得点のみ、高い傾向にあることが示された。

②未満児集団保育経験の有無による気質得点

未満児集団保育経験の有無別の各気質の平均得点は、表9の通りである。

未満児集団保育の経験の有無により各気質の平均得点に差があるかを検討するためt検定を行った。その結果、「フラストレーション・トレランス」においてのみ有意差がみられ(t=-2.08, p<0.05)、それ以外には有意差はみられなかった(「見知らぬ人・場所への恐れ」：t=-1.33、「反応の激しさ(反応強度)」：t=1.29)。

未満児保育経験有り群は無し群と比べて、「フラストレーション・トレランス」得点が低い傾向にあることが示された。

表10 気質と社会性との相関

	集団参加	自己統制	自発性
見知らぬ人・場所への恐れ	-0.069	0.099*	-0.164**
フラストレーション・トレランス	0.252**	0.503**	0.305**
反応の激しさ (反応強度)	-0.085	-0.290**	-0.100*

(注) *…5%水準で有意 (両側)・**…1%水準で有意 (両側)

表11 「自己統制」の予測変数

モデル	標準化係数 ベータ	有意確率	調整済み R2 乗
1 (定数)		0.000	
フラストレーション・トレランス	0.493	0.000	0.242
2 (定数)		0.000	
フラストレーション・トレランス	0.448	0.000	
反応の激しさ (反応強度)	-0.126	0.003	0.254
3 (定数)		0.000	
フラストレーション・トレランス	0.447	0.000	
反応の激しさ (反応強度)	-0.131	0.002	
見知らぬ人・場所への恐れ	0.109	0.006	0.264

4. 社会性と気質との関係

今回の調査で用いた社会性尺度と気質尺度の関連を検討するため、社会性尺度の3因子と気質尺度の3因子の相関を求めた。その結果を表10に示す。

気質の「見知らぬ人・場所への恐れ」と社会性の「自己統制」との間に有意な正の関連が、「自発性」との間に有意な負の関連がみられた。また、気質の「フラストレーション・トレランス」と社会性の「集団参加」「自己統制」「自発性」の3因子全ての間には正の関連がみられた。さらに、気質の「反応の激しさ (反応強度)」と社会性の「自己統制」「自発性」との間に有意な負の関連がみられた。以上の結果から、社会性尺度と気質尺度の間には、多くの関連性があることが示された。

次に、気質が5歳児クラス時点での社会性に及ぼす影響について検討するため、重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った (従属変数: 社会性総合得点と各社会性因子得点、独立変数: 各気質尺度因子得点)。なお、データ数の少ない5歳時入所園児は除いた。その結果、「自己統制」においてのみ、気質尺度の「フラストレーション・トレランス」が正の影響を強く与えていることが示された (表11)。

考 察

本研究は、3歳未満児からの集団保育経験が、5歳児クラス時での幼児の社会性の発達に及ぼす影響について検討することを目的として、保護者への質問紙調査により検討した。また、幼児の社会性の発達に関連する他の要因として、幼児の気質を取り上げ、幼児の社会性の発達における未満児集団保育経験の影響について、気質という要因をも含めて検討した。

入所園時の年齢により、対象児を0歳時、1歳時、2歳時、3歳時、4歳時、5歳時に分類し、本研究で社会性の指標とした「集団参加」「自己統制」「自発性」およびそれら総合としての「社会性総合」の平均得点を比較したが、いずれにも有意な差は見いだされなかった。また、保育所と幼稚園では保育時間が異なることから、保育所児のみを対象に同様の分析を行ったが、いずれにも有意な差は見いだされなかった。

以上より、保育所や幼稚園に何歳から通い始めたかは、5歳児クラスの時点では、本研究で指標とした社会性の発達には影響を及ぼす要因にはなっていないと考えられる。

一方、3歳未満児からの集団保育経験の有無別に社会性得点を比較すると、「自己統制」得点においてのみ、3歳未満児からの集団保育経験がある幼児の方が得点が低い傾向にあった。この結果は、土屋・久保・濱(1984)の結果とは異なっている。土屋らの研究では、4歳児クラスの時点で未満児から集団保育を経験している保育所児の方が、幼稚園児よりも「自発性」と「自己統制」の得点が高いことが報告されている。本研究では、社会性を測定した時点が、土屋らの研究よりも1年遅い5歳児クラスの時点であり、かつ、質問項目も多少異なっている。これらの点が結果の相違に影響している可能性はあるが、この点のみが結果の相違を反映しているわけではないであろう。

また、本研究の結果から、3歳未満から集団保育を経験した方が、自己統制が低いとするには早計であろう要因として、「見知らぬ人・場所への恐れ」、「フラストレーション・トレランス」、「反応の激しさ(反応強度)」の3つの気質を取り上げた。未満児集団保育経験の有無により気質の平均得点を比較すると、未満児集団保育経験がある幼児の方が、「フラストレーション・トレランス」が低い傾向にあった。また、「フラストレーション・トレランス」は「自己統制」と正の関連があり、さらに、重回帰分析により「フラストレーション・トレランス」が5歳児クラスにおける「自己統制」に正の影響を与えていることが見いだされた。これらの結果を総合して考えると、3歳未満児からの集団保育経験が5歳児クラス時点での「自己統制」の低さに影響を与えているのか、「フラストレーション・トレランス」という気質が影響しているのか断定できない。

気質については4歳時入所園時において、「見知らぬ人・場所への恐れ」得点が他の入所園時群と比べて高い傾向にあった。「見知らぬ人・場所への恐れ」は、「自発性」と負の相関が見いだされている。4歳時入所園時は、他の群と比べて自発性得点が統計的に有意ではないが、最も低い。さらに、少人数で統計的分析からは除いたが、5歳時入所園時においては、さらに低い得点になっている。4、5歳時から集

団保育を経験し始めた幼児にとって、自発性が育ちにくい状況にあるのかもしれない。あるいは、見知らぬ人や場所への恐れという気質が自発的な行動を抑制しているのかもしれない。しかし、気質については、2歳頃のことを想起しての評定であり、5歳児クラス時点での子どもの様子が、評定に反映されている可能性も否定できない。

本研究では、何歳から集団保育を経験し始めたかという集団保育経験の開始時期のみを指標として、5歳児クラス時点での幼児の社会性の発達への影響を検討した。しかし、どのような保育がなされているかという保育の質や保育環境が子どもの発達に影響を与えている可能性は大きい。今後、同一保育所内での比較など、これらの点を含めた検討が必要であろう。

引用文献

- Aureli, T., and Colechia, N. 1996 Day care experience and free play behavior in preschool children. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 17, 1-17.
- 朝生あけみ・斉藤こずゑ・荻野美佐子 1991 0~1歳児クラスのいざごにおける保母の介入の変化 山形大学紀要教育科学, 10, 99-110.
- 樋口寿美・藤崎春代 2014 Toddler期の子どもの集団保育活動参加への自己調整と保育者の関わり—情動調整に着目して— 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 16, 21-32.
- 本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子 1991 子ども間のトラブルにおける保母の働きかけの効果—保育所における1-2歳児の物をめぐるトラブルについて— 発達心理学研究, 1, 106-115.
- Howes, C. 1991 A comparison of preschool behavior with peers when children enroll in child care as infants or older children. *Journal of Preproductive and Infant Psychology*. 9(2-3), 105-115.
- 柏原栄子 1982 保育所における母子関係の一考察—Masked Maternal Deprivationを手がかりとして— 聖和大学論集, 10, 169-190.
- 金田利子 1969 乳幼児の社会的近く経験の効果 第2報—乳児期の対人交渉の発達と集団保育経験— 日本保育学会発表集 22, 175-176.
- 金田利子 1972 乳児集団保育の効果—乳児期の言語的思考の発達において— 日本教育心理学会発表 論文集 14, 106-107.
- 百木満ち子 1980 集団保育開始の適齢期に関する研究—社

- 会性発達立場から— 聖和女子大学論集, 8, 125-141.
- Lamb, M., and Sternberg, K. 1990 Do we really know how day care affects children? *Journal of Applied Developmental Psychology*, 11, 351-379.
- 松永(朝生)あけみ・斉藤こずゑ・荻野美佐子 1993 保育園の0~1歳児クラスの子ども同士のいざごごにおける社会的能力の発達 山形大学紀要 教育科学, 10, 505-517.
- National Institute of Child Health and Human development Early Child Care Research Network. 2003 Does amount of time spent in child care predict socioemotional adjustment during the transition to kindergarten? *Child Development*, 74, 4, 976-1005.
- NICHD Early Child Care Research Network. 2003 Does quality of child care affect child outcomes at age 4_{1/2}? *Developmental Psychology*, 39, 3, 451-469.
- 大野愛子・伊志嶺美津子・浅野ひとみ・三俣美代子・櫃田紋子 1983 保育年数による発達差について(2)幼稚園児と保育園、及び男女の比較 日本保育学会発表集, 282-283.
- 齋藤政子 2012 3歳未満児の保育環境に関する保育者の意識の実態 明星大学研究紀要—教育学部, 2, 91-105.
- Schindler, P.J., Moely, B.E., and Frank, A.L. 1987 Time in day care and social participation of young children *Developmental Psychology*, 23, 2, 255-261.
- 総務省 2013 ワーク・ライフ・バランスの推進に関する政策評価書(要旨)平成26年6月.
- 菅原ますみ・島悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則 1994 乳幼児期にみられる行動特徴—日本語版RITQおよびTTSの検討 教育心理学研究, 42, 315-323.
- 高松真弓 1984 集団施設保育が幼児の発達に及ぼす影響に関する追跡調査—1.調査開始時と4ヶ月後の状況—和歌山信愛女子短期大学研究紀要, 24, 60-68.
- 高松真弓 1985 集団施設保育が幼児の発達に及ぼす影響に関する追跡調査—2.調査開始時と16ヶ月後までの変化—和歌山信愛女子短期大学研究紀要, 25, 47-54.
- 高松真弓 1986 集団施設保育が幼児の発達に及ぼす影響和歌山信愛女子短期大学研究紀要, 26, 51-57.
- 土屋博子・久保和男・濱 淳子 1984 幼児の社会性の発達に関する研究—幼稚園と保育所の比較—日本保育学会第37回大会研究論文集, 540-541.
- 上田哲世 1984 乳幼児集団保育に関する考察—保育所保育における問題—聖和大学論集, 12, 135-151.
- 謝辞:**本研究の調査にご協力頂きました保育所および幼稚園の保護者と先生方に心より感謝致します。
- 追記:**本研究は、第3著者の卒業研究(群馬大学教育学部に提出)のデータを第1および第2著者が再分析し、まとめたものである。